

# 槐かい

岡井省二副刊

平成25年10月号

平成二十五年十月一日発行 第三〇九号  
〒410-0001 静岡県静岡市清水区藤原町一丁目1番1号  
電話 054-251-1611 代表 054-251-1612



# 天竺牡丹

高橋将夫

恐  
竜  
の  
面  
影  
残  
る  
羽  
抜  
鳥

そ  
れ  
ぞ  
れ  
に  
片  
陰  
を  
持  
ち  
墓  
並  
ぶ

母  
の  
ゐ  
る  
場  
所  
は  
風  
鈴  
よ  
く  
鳴  
り  
ぬ

傾  
城  
の  
扇  
の  
風  
を  
貰  
ひ  
け  
り

平安京千年ぶりの猛暑かな  
冷酒に酔うて宇宙の旅となる  
大夕焼時空ゆがめてをりにけり  
上り梁魚も時間も止められし  
ふくよかな仏天竺牡丹なり  
貝を焼く女の汗の美しき  
妄想は入道雲を凌ぐなり

# 槐安集

水野恒彦

殞<sup>もちり</sup>終ふ天牛の翔つ閑けさに  
闇涼し靈気は遠き星にこそ  
二階には喪服吊され土用波  
きはちすの花や人語も澄みはじむ  
金糸の声降りて時過ぐかなかなかな

延広禎一

阿波をどり蹴出しの招く浄土かな  
瑠璃とかげジュラ紀の色と息づかひ  
峯雲を拂ふ如意棒正眼に  
蛇穴に三年寝たるえじやないか  
うかれ坊主うれしいうまいうなぎのう



加藤みき

夏蓬一列に過ぐ子供たち  
片蔭り渡り廊下を踏みしめて  
日はときにスナイパーなり夏の空  
お囃子や人も太鼓も汗かいて  
はかり知れぬ谷の深さよ鷹渡る

石脇みはる

初夏の森朝日を浴びて目覚めけり  
やはらかく畳を拭きし立夏かな  
早苗饗や大鉄鍋の煮たちをり  
ハイタツチして入れ替る夜の秋  
緑蔭に先客のをり目礼す

中島陽華

八朔の十三塚の舟着場  
黄道や壁にはりつく三尺寝  
寄り合ひは奥の納戸へ土用丑  
世阿弥の忌無花果を椀ぐ破目となり  
蝮谷翁の木霊届きをり



竹内悦子

鍵穴の奥の齒車蛙鳴く  
半眼はしつかり見えて半夏生  
すぐそこに杜鵑をる息遣ひ  
山路ゆくひよどり草も虎尾草も  
道標に毛虫八匹恙なし

雨村敏子

四萬六千日硯の海のよく乾く  
十葉を刈りたるあとの水の音  
甲矢乙矢ぜんぶ使うて浮いてこい  
いつの間にか松を離れし梅雨満月  
天の川だんだん海の近くなる

本多俊子

混沌と八月の楨が一本  
蟬声の真下にかがむアミニズム  
老鶯の声浴びてゐる吉祥天  
花槐正面に立つ過去未来  
文月や身をひきしめて眉をかく

近藤喜子

純白に常とほの憧れ花氷  
未来への入口に咲く蓮かな  
蟬の穴太陽に向く出口あり  
夕虹や軽やかな気の降りてきし  
水打つや張りつめてぬしもの消ゆる

瀬川公馨

列なしてドクダミ古参の紅衛兵  
むらさきの山をなしたる蝦姑の殻  
前世は何ぞや炎天ありく咎  
蒲の穂やマリンピストと芋焼酎  
象牙の扇使ふてゐたる女かな

久保東海司

噴水よし陽を驚づかみする気配  
泳ぎ出て息合ふ親子抜手切る  
三山のふもとなびく青田の艶  
茄子漬の紺澄み朝餉賑ぎ合はず  
一人では出来ぬシーソー炎天下

中野京子

朝焼の仏の海となりけり  
引潮の礁をつたふ素足かな  
白雲を駆くる小蟹の潮溜り  
海境にそふ漁火や籐寝椅子  
初蟬の地霊一声聞こえけり

柳川 晋

短夜に天体生るる気配かな  
翡翠に塗り替へられし朝の色  
生れてより虹の根元をさがす旅  
西日濃し河童の影とすれ違ふ  
熱き人ますます熱く冷し酒

近藤 紀子

ことほぎの百合の馥郁抱きしむる  
でで虫いいな三界すべて家つきで  
鋏投ぐ呪ひ効きぬところてん  
八の字に茅の輪をくぐる神の前  
名残惜しむかに形代の流れゆく

岩下 芳子

雷鳥のけんかつばやき孤高かな  
噴水の穂銅の鯉の口  
夏富士やだいだらぼつちひと跨ぎ  
白靴で大アフリカを一周す  
上人の舌先に蚊の止まりたる



# 槐市集

有松洋子

熱帯夜空き缶蹴飛ばす音のして  
炎天の砂漠や消えし靴の跡  
孤は明るく群れてさびしく向日葵は  
吊橋を揺らす少年雲の峰  
飛行機と子供が愛す夏の空

山田佳子

携帯を鳴らせて僧の単足袋  
蟻の列道草するも善しとして  
風鈴の音の快き節電日  
水の面橋に映して納涼船  
声明の染みる魚山の山清水

山根征子

水無月やわれは不断の枝にをり  
蝦蛄売りの伊勢商人の消えにける  
虎尾草の天を掃きたる尾の一閃  
熊蟬の一樹をゆらす真昼かな  
力抜く術をしらずや不如歸

吉田順子

風に揺るこぼれんばかり花槐  
晴天に松葉牡丹の真昼かな  
今年竹ぐんぐんのびて未来あり  
沖晴れて来し紫陽花の地平線  
鶴渡るかなしきまでに海碧く



# 槐集

## 高橋将夫選

蟬の穴時間が砂に消えてゆく  
岡崎 寺田すず江

生きて在る時に悲しき大夕焼  
夕日ふたつ並んでをりぬ晩夏かな  
金魚玉謝りながら水を足す  
置き去りの浮き人形に日の翳り  
出来たての風がほしくて扇買ふ  
枚方 熊川 暁子

水に影生ませて夏の樹となりぬ  
茄子の馬母の小言をのせて来し  
夏座敷 釈迦も仕給ふ肘枕  
水打つて石それぞれの貌となる  
新生と退化の速さ夏の雲  
岡崎 岩月優美子

風死して静止画像の中の我  
炎天を来て鏡中のデスマスク  
桑の実や遙かに還りたきこころ  
少年の声は太らず青葡萄

言霊の力消えたり滝の前  
大阪 江島 照美

夏の川生命のみこみ大海へ  
抗へぬ甘き罨なり誘蛾灯  
香水の香よりも君の香に酔ひし  
山滴るタダでもろうた命なり  
あれこれと詰まる巾着生身魂  
喜屋川 山根 征子

百日紅生きる力の美しき  
夏足袋のキャラコに昭和古りにけり  
ラムネ飲む大正生まれの妣の顔  
逝きし人さがしてゐたり沙羅の花  
真夜中のテーブルにある金魚玉  
摂津 中田 禎子

笹舟や大河へ続く鮎の川  
炎帝を振り切つて入る仁王門  
まみえたき人あり蓮の花一面  
円座二つ影なきものの声すなり

# 銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

金魚 玉 謝りながら水を足す 寺田すず江

ふと気がつくとき金魚玉の水がだいたい減っていた。「金魚さん、放っておいてごめんね」と謝りながら水を足した。「謝りながら」に作者のやさしさが感じられて好感がもてる。

へ生きて在る時に悲しき大夕焼へ置き去りの浮き人形に日の  
繋りへ、どこか淋しいがそれもまた現実。

出来たての風がほしくて扇買ふ 熊川 暁子

彼方より吹いてきた風に対して、扇で煽いだ風を「出来たての風」と捉えたところが素晴らしい。その風を得るために扇を買ったというが、新しい扇を使った風はまた格別であったろう。

へ水に影生ませて夏の樹となりぬへ茄子の馬母の小言をのせて来しへへ夏座敷釈迦も仕給ふ肘枕へ水打つて石それぞれ貌となるへはどの句も秀句。

風死して静止画像の中の我 岩月優美子

自然の動きが止まった風の景の中に居る自分を「静止画像の中の我」と客観視している。風のない盛夏の暑さと息苦しさは伝わってくる。

言霊の力消えたり滝の前 江島 照美

滝の前に立つと滝音で言葉が聞こえにくくなる。当然、自分も相手も声が大きくなるわけだが、そんな情景を「言霊の力が消えた」と捉えたところがユニーク。

へ夏の川生命のみこみ大海へへ、川が海に流れ込むのは当たり前だが、「生命を飲み込む」句は他にない。そして、それは厳しい現実。一転、へ抗へぬ甘き畏なり誘蛾灯へ香水の香よりも君の香に酔ひしへは耽美の世界。

あれこれと詰まる巾着生身魂 山根 征子  
あれこれ詰まっている景はユーモラスだが、それが巾着というものの本質なのだろう。そこに生身魂が出てくると、生身魂のこれまでの人生のあれこれまで詰まっているよう。俳諧。

笹舟や大河へ続く鮎の川 中田 禎子  
川は海に流れ込むものだが、笹舟の流れる大河であるところがよい。鮎が上る川であるところがよい。

明易や湯元にもらふ人の情 前田美恵子  
温泉の湯元から湯を分けてもらったのであろうか。いずれにせよ人の世は持ちつ持たれつ。決して浪花節ではない。

風鈴は風の笑声 眠る 有松 洋子  
風鈴の音を「風の笑い声」と聞いたのは作者ならではの感性。その音色の中でやすやすと眠る幼児の顔が目に見えるようだ。

青嵐三年寝太郎起き上る 竹 中一花  
青嵐の中でやおら起き上がった三年寝太郎、はたして何をしようというのであろうか。新しい物語がこれから始まる。(以下略)